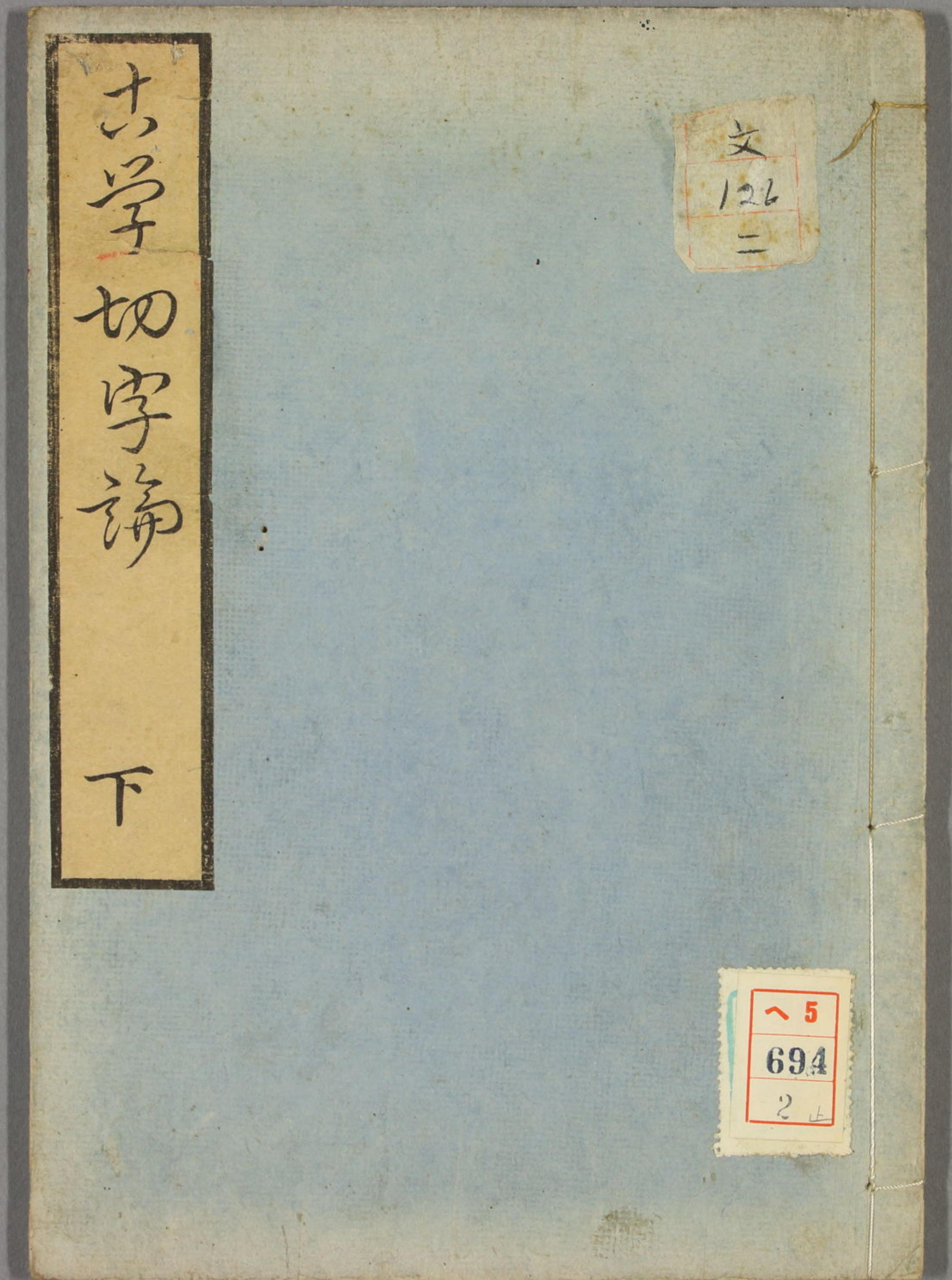


3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9



利  
門號  
卷

明治三十六年十一月三十日

坪内雄藏氏寄贈

自序よま人のざよそくひ。うみづくめ延々と  
童蒙のたそけよしとおかひらうわく下男

洛溝口竹亭

そもふぶ。あのニさよるおへそへだ黒ぬれ  
切字うて切るふよへ乍そ掛くそそ  
み月ゑ例をああよくむ泣の人

いく子そむくそいはづくまへき年のそそ  
を角

なめくそくふ本陰るそそく枝のゑ  
に扇わいふおへそひ行のうひ 千那  
うくのめくへやを拭てげふそ切字とそくへ

しきひがごろく。故よ幼少の人の得」とす  
是等の如きを下よ疑の句ありて。下よモ法い  
あるぞ。法いとて調ひ切々と。法いと云  
う。法のそゑよくも。いふるまへき め や  
たれ本除る。いにせきくのめく  
△下付く下そ法いとつひ。ゆとつあべ  
ひおの切る下とて△下付く。下の首  
う。△よきと動くぬ句。又言うけよて法ふふ  
切る。何。又。待びよ抱くぬ外よさまく独有  
けれ

我のう鶴よおそなれ 猫 わ ね本

うく廉とさくといふをうぐふ  
げ二う切るとそ一ふかど。上よこまと  
くそそとみそば。はるとさくといふ  
そくらんの。社を者きくわといふ。がくア  
こそそ者きて。けれとよきふ例える。生  
下 知そ

ちよそとよきふとよきふとよ風  
はる下知よ細てそそ一ふ遙へり。林ふ一もる  
河へかのふとつよ。ふいそのかよの字。るきな  
るへ。げ。例えそ玉川のあよおやいそ女  
あら。さだるきくのめきの。け。例え

ううひてや。かのせの人めりもあらと。こく  
きくの罪をうへ。まくのをうへ。むか川の水  
よナおわいそとあかくまのまそ者をきく。法  
すどくよんあくままで。下のそそびく  
定く例うかと。上の置くるそ者く例う  
し玉川の水よおさりかめく花と。みの字  
ぢくろうぞよう一ほほく。林すきせ  
ううぬとふおかひそゑ。スヤウア  
ううのとくあくま。カクよいとぐあと  
マホホふくと。のうすうが。月よえ。あた  
るのき。うのとくたま。りそとつまそそ者

た宣く。ま木集原仲正。うよ。うちゆくも行へ  
スヤウ。いそくの木のスメくも行く。はち  
に。けうるの字うくと。そのまぐく。伝て  
けくとも得る。

切字うくと。不有分別。和及  
はくくと。うくふのそやく。貞室

余のまよくと。おととリのま。和及  
ふくまくと。うくふのそやく。モ角  
かくそくしめんのま。うくふのそ  
かくのとあかとさく。あくはうじ。うく  
よくくと。下ス。あく。内。うく。外。うく。分別

といふ。この切字といふゆうづみがて  
りぬ。いろくもつともきて用よへ  
やるまよやくの木の花 安丸  
ふくら一の沖の神うは石の方 用不  
やすとかととく些の違ひあれと。大抵曰しよよ  
て。さうの裏へひき辞くら一の沖の神う、  
ハナレ負の方とつみてよゑ。やはとすれぞ沖の  
科やくトカニテハとつぶやどよほのよ。ぬまよまの  
やはく一ねあう。ぬまよまやハくの木の花かや  
くら一の沖のす 北邊にかのやまかく。やすかくのす  
まあくは編よま

げよぞくえすみゆ。切字もあれば。内もよ。是によ  
られ。一切の内。動く内と動くぬ内。ゑえち  
あうる川のれ。と。山。川。す。川。す。す。す。す。  
下。徳。き。し。狂。言。も。用。言。も。徳。く。う。四。そ。  
は。ス。と。ぞ。く。さ。よ。言。を。含。め。狂。言。よ。続。け。花。の  
吉。ゆ。ふ。と。あ。く。く。余。そ。す。は。う。ま。ご。く。も。下。  
定。り。く。切。字。の。外。う。

引。ア。ア。ダ。と。つ。て。だ。ア。レ。レ。ダ。の。黒。ま。き。切。字。く。  
我。が。君。が。と。ひ。て。そ。不。切。リ。そ。一。リ。よ。ハ。ル。め  
フ。ア。ア。う。く。げ。よ。ぞ。く。が。切。れ。も。と。や。ア。あ

曉山集 文禄二年校本

應芳山著

下の巻百二十八丁メ。てよとはとうす  
ひとのつみ。ホ。放。ま。今。ひ。く。の。え。が。よ  
ら。い。表。う。又。は。よ。あ。い。ば。く。う。そ。て。ひ。ま。う  
ち。あ。ち。く。ぬ。人の。争。い。く。後。名。セ。十七。字。共。よ。て  
に。を。は。る。モ。内。て。よ。そ。ほ。の。四。字。ス。殊。よ。そ。く。活。き  
修。経。よ。四。十七。字。と。で。め。て。ゆ。て。て。に。を。は。と。云  
自。の。え。と。ち。か。く。又。黙。一。て。て。よ。は。と。し。よ  
予。う。考。し。じ。よ。内。し。荷。田。刊。之。が。モ。徳。考。字。キ。と  
え。ね。よ。で。よ。そ。は。と。つ。よ。の。考。あ。經。緯。終。

始の田言を一語みてにそはゞゑづく。て  
にそはゞゑづく。てにそはゞゑづく。  
にそはゞ骨ホチ。經緯タテヌキ。アイウエオの五言  
そたてと。アカサタナの十字をぬきと。  
ぬきと。アカサタナの十字をぬきと。  
ぬきと。アカサタナの十字をぬきと。  
テの反カヘシで。又キの反に終始の二つの。そほの二字  
されて。てにそはと。又ハラの反ホ。ニテの反  
子ふ小大。てにそはと。骨ホ。や。わ。う。と。よ  
こぢ付ハタハタと。ひそか。眼メシ。口ムツ。集スルの役ヨリ。よと。よ  
伸縮ホモコト。よと。よと。よと。よと。よ  
又仮を四十七字書よ。てよそはといへもしよ  
く。ひふよ。余をきてつよ。

とくとまくの。をよみえそひとへる。よく  
ふらのさそひ<sup>ワカ</sup>。近づむびとんで立べり。さて  
はるのはと後列のやなことと目安を三條  
立ち始てせよ出そす。せのへきようがりで  
あざまよのいひふら。ち袖よ活小さく  
せたの形よあく。ときせとうくとく。はれ後  
きの伝ばねの心のかよひよ。川船の左  
よおゆす。れの例そつまのアラシがく。既よ  
玉の伝ね魔減先年再ねや

あるたゞとあたゞとやあな笑止。ある笑止や  
あるたゞとあたゞとやあな笑止。ある笑止や  
あるたゞとあたゞとやあな笑止。ある笑止や

あるたゞとあたゞとやの字いそぬふよかくといへど  
かくきふ例え。あよあ思ふとそろとつふ  
例とそ遠つたふとくと一ツの河うるわそとハ  
みくくとしよ源よ。玉と続け物ぬ河うそとあ  
神をよかうてえーきれのを  
げう切字すと改めうそとやさかき、

みやせをよ實ふえ。枕ふるをひて無しきとつま  
うの極と同ドえさうえーくとそいそぬ河  
げうえーきと正例の幾めて歌ふ。翁の  
追慕のうも。枕ふるをひてかうえーくとつま

手尔波抄 文化三年秋

不盡谷成元

書大言靈の字と元とし。五十韻を正し。古字  
し出で七部集發り付くよう。てよはそ教  
へ。宣長翁のそへ一かとそ點コトカツ。又一見識  
有一流の書也

されこそひるの柏子のあまむか  
上よこそとあれ。られとえへきりう。然るそ  
とえへきりう。こその例と哉の例とふうそ  
えへきりう。

そをせどとつよ。先をのりのあみよだいハアを  
昌の子のあうぐれ因のを報打る。故是  
務すさへあづまろくとやとあもそれ生。季立  
とく魔のふといふりうよ出されとくはそし  
サ第二例名の哉

樋の木に花よかまえぬゆめくよ

翁

きわく人そ体むし力足と全  
こひのあよまき姐のくつわ。越人  
めけ一川下の水へほくへきがモ弓  
ミ姿因々道の當明ときの棲り。是モ可て  
ひととく魔のふいが正例くるを知る。

魔の哉ヒツクス。ヒスケス。はいとあう。是  
その正例といつ。がまえぬよ体むしのむ  
たとく。花よかまえぬ。染そとつふく。さい  
あかまえぬぬびと。下上よる。すくは  
きねある。すくと。いそれ。そむてむつ  
ゆくと。あく。門のこきよ。怒殺  
ま扇の侍町のあつさや。や波  
おみ焚門。扇臺は町。上の門也よきよつきた  
いを立。も合門そやぢて哉よ含く。例くと。すく  
おえがく。門のこきよ。は町の署キシと  
ちんきて。えス魔のふそ正例といそく。く

いふかわど上もくわせ。此れちばねのえよ  
りくろく、くよて子ゆく  
丈まつたのひの花のみて ナラシ そら  
五月ゐよくふぬわや、むか田のね ナラシ みる  
大あややのやく。やのひよ。くわぬわやの やよよ  
ス。ゑくのやく。こそ中のやとく。鏡のやのね  
よつ下よナリ。と内を含むよ。とよーいま  
あやすてぎごご。おさみカシカ 較カシカ るよ。定せま  
けうのやく。まくみ。ハエモカトヨウ下よくまと  
いふくろく。その字えをす。やくわくと  
もじてやくわくと。このよきひてもせんしも

おとづるいりと。まへどはえと上たひよ例うきある  
いどにとくじるゆゑもゆふへとくい合  
くのとくへやふれとも。成えうて保よて  
ぎ、そよてスう。やすもきもとちてひ  
そぎがうとゆうを付ぞとひてらるよ  
もといス下へス。大さうに換へこぎ、  
あくび、ギ又鱠ヤ又感俗ヤおぎ、カシカ歎サスと口ド  
く山川よみて。針のゑわ。よく人を刺。ゆるよ  
得てざく。おさゆ。舡シガリとある。引だ引と  
す。よく字形の似ハナふ。びき。えをう  
かきす。ゆくおそいそうとし

けり。まよかさようち合せぬすへいそぐき  
といふてゐる。正例はあらざくう  
くるいふれと遙へ。自他のまよ。既にも  
あらも。我假は假くうむちをよもえきの  
とう。げら。我假は假くうむち。時をよ  
止そ奈して。内を假くあがへそぞだま  
ぢやとあがへそぞだま。然もといそが  
ト假。自己にまよひを付ふれて。我  
假のやさかへいそうそへまとくね合  
けぞそつももぞく

いつくよたふふきとせ社のゑ まよ  
いつくよとつふうの字。あらぬとういつく  
よとつふうあれあらぎき。たあれふもらんね  
こそつまづられ。かくみくのとく。たふれふきと  
もといふ。いづくまといふでえさまぬるえ  
といふふくのど。うくうきいづくよくと類ひ  
とく辭の皆びよス可ひふと。うきうくま  
不可ふ。げく意ス。うきうく。御の上の上。が  
倒れ死る人ぬ。いづくもせよ。社のゑ。ふ倒  
き死る人といつて。うきうく。うく。うく  
うて。いつくよたふふきとせ社のゑ。又

たすかすそらんのゑ。くのどせすとい  
ふれてス。萩のゑ。倒れふりといふやう  
まえで。おえ。萩のゑ。倒れ死るやうふ  
言ふ可也。かく又にすみすむといふ。  
いづくよといふと。もまぬと。いふふれ  
ど。ひと。ある。くへつぞいづくよ倒れふを  
と。萩のゑ。うぢやぢやと。ふるよされふう。  
は。けり。と。ふく。あ。ま。と。い。ふ。が。可  
て。め。く。つ。く。ふ。例川。う。え。翁のゑ。又。倒れ  
ふ。も。ま。う。う。と。ふ。と。ふ。と。ふ。

ふ。す。ゆ。密。相。の。ゑ。の。ま。よ。す。う。て

え。せ。せ。

は。の。ゑ。の。や。う。え。あ。の。と。付。の。よ。あ。い。ひ。除。く  
き。い。捨。く。て。の。字。な。く

じ。え。る。伊。が。の。様。雖。う。あ。り。て。無。行。き。一。五。十。貫。の  
け。の。附。の。よ。ど。そ。く。の。ご。と。い。ふ。り。は。う。よ  
ぞ。や。成。え。和。学。志。志。て。伝。傳。師。よ。あ。う。だ。る。故。の  
得。う。う。是。そ。と。へ。て。附。の。を。む。う。と。心。に。遠。ひ。き。  
う。例。る。ぬ。れ。み。年。の。ね。平。伊。が。上。や。裏。虫。庵。う。著  
や。す。密。相。の。ゑ。と。ふ。集。の。序。よ。曰。そ。ひ。も。け。く。そ  
ゑ。く。と。定。め。オ。ニ。と。そ。や。う。ば。ほ。ま。く。り。ひ。く。そ  
情。せ。の。ほ。そ。梓。アツサ。よ。上。セ。て。祖。翁。の。ゐ。よ。け。く。の。な  
ほ。と。う。う。内。門。の。好。土。の。ゐ。百。世。の。惑。そ。解。人

とそどうかと相あつたやう。わねハセキル  
猶弟ニのれよう文考猶弟也とくう

成丸内四日今猿飯す

お金は引ひそさますねまど

月はくくくく 乙 やめくく 猿飯

町の門追ふ 庸のよこえて 猿飯

支考

翁

ニ オミコメ 中里

門の門の門 入れ くま

飯

一月のねじねのそきくを置

翁

山の客相の色のちづくして

翁

日うれてく 犬のむやわ

考

寂菴

古写本有  
文化九年板本

春秋庵

白雄著  
拙坐增補

凡例は拙坐曰安永本實政平ニふむよ。予  
持る字平雪門藝阿持しとみ年の時字し  
りを小であ承平らうくし。め字の單又づき  
ものたよがて延年くの書く。今文化の板  
平そくよ大むね遅くに書く。書其よひすて  
よく人の柱とあるを書く。内誤あり。不そ  
れ生て除重もん人そ聲うそ  
ゆてよみとろひや歎く。嘗てあ昔のせ 翁  
おとうひとえいさん。おとろつとひみへし。お技

とてよからず。下の巻九丁メも同々そりで  
れぞろひとかれ、いふまづや  
**(補)**とあく。拙書すが神せらへる。かうそぞ  
よきおそるそあく。筆をあくとつまふとあく  
るどさう。是く句のほきとそくぬ得る。あ  
あきあくと法てあくとほくらう  
毛糸於手のす

ちく精一系の保そばくしよくしてよそ  
はのその字ごよみて。人よてにそはのよそ  
そくふく。紙の精そばくも危き也ざや

下の巻十四丁 深のす

春林集白鶴集

押あやまらふの秋そ立てし。は出  
え川やせそよふて。まくまく  
ひしてゑす。立てまくまくと。子ゆる  
鳥のゆり。御要る。切字といふも一匁を収めん。  
くく経ち。もあく。に。上ス法句を詠言。お  
ふとよ一橋う。豆豆すと。よもよも。ち  
えきくまゆ。ねえ。モ例句を引て。おそ  
小川の下や葉か子の水のみ。丈学  
余さぬそく。そく。一

きくも猿毛ひる 淌乳う那

宗直ふうそもや人のううかとまう女の自分のう  
るをゆる。男のううをゆる。他よまく  
うとうる猿毛びる自う。いづれ自他もく年一  
ざるあうて人の师くまく

と笑ふれくわど女の自分のうそ。男の女よろくち  
モて心する。そのとくう。又男ふてもゆるせ  
ぬとすな。稚子を抱へ産うてゆる。ふくらみ  
のたるふぞ乳スヨリともぐくや己がゆる  
てやうううど胸あく小だ。乳うて男かうゆる  
すとくえに仰げる。一、稚セテミ利屈う

同貞外ニトメ浮哉

内ほし今宵ス汐も海ふうな

ゆふくらゆよよ切字をせひく

ひいひよしうくうひばくスニ腰よ切く

ほふがそ一勺の切とそ。ぱものてよはよふそ付て

お柳さぞみるくは女う柳

拙室曰、饅舌錄よ古字平みと併て。極柳さむ。あ  
おふく女ふく生やく。極を柳をあふと女ふたとく  
きよて。さもとくり歎を。人そなぶらうせう。ばくと  
延室天和のゆう

さひとと丞やまくありふ。のまえこよとく

けりス。そひの内俗をよく述べ。時代世人の手  
にて、傳達する所寄る。途中にてあるどより會  
ふとき、拿もさうばめれうづくらむことか  
う。中畠 玄正<sup>アキマサ</sup>が、女流行。あはれ物みどり  
や。そこで、時あはれや女の立派とてねぐら出るな  
らんと云せのをまるく 中畠 さぞとつふ句とておひ  
やりく。おもいきをまことしゆく。

け役<sup>アシガタ</sup>さぞといふ句を推量の句よれ  
推量<sup>カツタ</sup>さぞ暑暑<sup>カツタ</sup>アラウ<sup>アラウ</sup>テ さぞ<sup>カツタ</sup>アラウ<sup>アラウ</sup>と  
いふ則推量<sup>カツタ</sup>春秋庵<sup>カツタ</sup>のちくの如し。前よ言  
ふ如く、極<sup>カツタ</sup>極<sup>カツタ</sup>セ<sup>アラウ</sup>おはや

女うどん三派<sup>ミハ</sup>よねぐるもろうんとらふすう  
ぞ哉と通てス。てみはうのくに。故<sup>ク</sup>けり。てに  
はうのくぬとて。鏡古<sup>カツタ</sup>の外<sup>ミ</sup>もあふれん  
うのくすう。そそぎ<sup>カツタ</sup>さぞといふ句を推量の句  
うのくわくわかのくう。そとつふ句。かくえ  
そのうううとつふ句。さもくとさくもく  
はう<sup>カツタ</sup>て推量の句ともうくすう不二谷  
考<sup>ソノヤウニツ</sup>おちうり<sup>アヒ</sup>あつま<sup>アヒ</sup>やはまうのむよ  
月<sup>カク</sup>もさそげく<sup>アヒ</sup>あかほの室<sup>カク</sup>さそく  
や恨<sup>ソノヤウニツ</sup>うの<sup>アヒ</sup>さそ<sup>アヒ</sup>の人も<sup>アヒ</sup>く  
持<sup>アヒ</sup>て推量の句といつと。きつと推すべきかの

あくまでもさよりくわざ。とみえきてま  
はやうとあらんとゆかひうり。と。護おゆの方  
すうととある。ぬけうのてにはのそひそ  
梅柳<sup>ソメウリ</sup>。あらがいがさと三段ま切れで  
まのうそ一のゆと。よくきひまつてに  
はう。

内五丁もよ護おゆといつる書。内の玉の徳といふ  
章のてよはそあうそや。書をそまく徳のてに  
ほよきば合<sup>ハマツチ</sup>。内の玉の徳を用ひざる  
わざ考證もある。いそくやちそくて徳を極む  
べけんや

ぐくくくくくく。上の巻二十二十の大人の清  
をつみて。和亨のてよは徳のてよはとてやう  
る。是日本のてよはうととせよといふ  
そや。是とよとせよとせよとせよとせよ

腰<sup>ヒザ</sup>の哉

のうの卯<sup>ウニ</sup>をあしむねうる

はとくふ字そりとみてきていと

はとくふ字そりとみてきていと。あくべほきみ  
卯<sup>ウニ</sup>。とほの字そとまのをよそほひ。ま  
ねうと二段よそくのア。見てにはの宣うる

捨<sup>スル</sup>や

ゞのき女のめぐわすさすや

めけよてよはるきみ又字を左へ。上み切るんあり  
そさまやを切らく。すさまとせよ。下

み金やうれそろく。てよはるきみ又字こと  
ひふみや

口会のや

是や世の様よ深らぬ。古盒子

翁

吹してうへ。口会のや。切字よくもほむて  
けうす一并の行きをよ切るく。先にも生せ  
やく。口会のやくよよとひともあくよ。

是や世のや。類のやう。深らぬと不のぬ  
とて結く。めけ室くわう橋をそくぬねよ。ば

タ一并の行きをな切るといへる。ぞとみて  
切く。やうもとそくぬざのち。うり。  
ス会のや。ぬもあくえこそ中。月  
是くわう橋を。こそそ切るよ。うり。うちそ  
れの先もよあくえ

けそく。強よまく。打こそとつぶ切字ハ。今  
こそよくある。こそよ行会。詩を省き。はく  
らん。是く上よ絶の行を。あへ。さくまでそく。う  
アラノオミ。タ。あ。塗ゆのうて。はくらん。キ文  
けうよ。絶の行を。滑あらかてや。とやの字。そく中  
よあめく。是く。ハくらんのえのとけきまの日

よもつみくら花のちくん。もつみくらイカテ毛のちくん。  
イカテの辻をこめ。すきうさうと。すきのけえもひく。然る  
ぞ。よろづひの辻をまよ子。田え  
りくいふくら人のるづく。いづぬのゆく  
らんとろをあくよ。上よ絆の辻をくてもせよくう  
くへそあす。辻の辻とおかえ邊。相の  
一ひら人のふひ。合せうへ。けぐえ。タあ塗  
われてゐるであらうと。あはれ。うえ。又塗わる  
てゆきと。かすみと通ふて。はく。是よえくの  
ひそり。ス云遁へ。じきすえ花のちくんと。の  
ようくくて。らんと。あくらんと。ほひれど

まゆを絞りてゐる。然るにそくしておはう  
むよし花のちよと。かると通す。然るにそく  
いえ。花のちよと絞りあはねだ。花のちよとえ  
をも。まやよそのちよれそくして。ひきて  
たまう。たまう。

饑舌錄 文化元年校本

文化元年极本

元木阿弥著

はおよ上の又文字。宝冠のやまとつまやの  
字。間力やかきやどなるかの笠またよろかの  
字又名まくら。君代や殿やさと。や文  
字を示のひと。けや文字を一向よ切れどと  
いふる。遠く。や文字くまくの辻ワタます。み  
やきせの宣。夕白がのよも。又けゆまいと  
六波りす。目出なすそち。系ス。反考  
十九君う代や。孰六。もあし。猪一。猪  
全 あうづき。カ所の中まくら。まくら。イッ  
波

多くのごく。幼きぬ印まである。下一ス  
イツと。一字入ても尔は合すと。十八のてには  
ひとつ。二字を十九。三字を二十のてにはと  
ふともと古人の役もあひど弃へ  
かけス△下リや△上今下そ。も  
片△下そ。も△上ち△下つ  
くくの△下ごとくに△上いと切  
そやの△下ご。令△上そ。も△下いと切△上もとをよ  
言へつけて。幼きぬ印まである。くくのめ  
すくそ中へさう。令△上そ。もと下へやう  
て様やすく△下令△上そ。もと切△下とい

へろハあひさう自化ツとのを。ふりよー

六カヤ<sup>△下</sup>まゆ<sup>△上</sup>かふく<sup>△上</sup>あうと 今

前よりし。まゆや文字の正義をいさん。後やの  
もス後。六月やのカス。六月ス<sup>△下</sup>とててもよ  
くくらん。後や六カヤ<sup>△上</sup>や文字をきいろ  
る。様ス本音の様みて。千仮のほき谷の上よ。夜  
蔓<sup>カツラ</sup>るどかて。みゆ<sup>△上</sup>みゆ<sup>△上</sup>みゆ<sup>△上</sup>。食とうら  
むと化ぢる余のふよあうび。けあるの様よ  
ねどつす。あまたの句をやの「字」<sup>コメ</sup>よ  
てよほう。こや文字のらぬく。六カ<sup>△上</sup>れ  
すべせ。六カヤ<sup>△上</sup>とくまく六月<sup>△上</sup>と七カ<sup>△上</sup>

もあうて。六月<sup>△上</sup>はくとくふすそやの一字<sup>△上</sup>こめ  
て致見<sup>△上</sup>こ<sup>△上</sup>け<sup>△上</sup>お<sup>△上</sup>ま<sup>△上</sup>い<sup>△上</sup>るめ冠のや<sup>△上</sup>と切る  
と「あま<sup>△上</sup>あま<sup>△上</sup>」。今<sup>△上</sup>の後<sup>△上</sup>く<sup>△上</sup>の<sup>△上</sup>ときあや  
た<sup>△上</sup>文字<sup>△上</sup>を<sup>△上</sup>ゆか<sup>△上</sup>と思ふ<sup>△上</sup>ひかるすく。わ<sup>△上</sup>とやめ  
字<sup>△上</sup>を<sup>△上</sup>ゆか<sup>△上</sup>ふう<sup>△上</sup>てゆく  
も<sup>△上</sup>日<sup>△上</sup>や<sup>△上</sup>代<sup>△上</sup>の<sup>△上</sup>す<sup>△上</sup>とふ<sup>△上</sup>く<sup>△上</sup> ち哉

け<sup>△上</sup>か<sup>△上</sup>こ<sup>△上</sup>法<sup>△上</sup>集<sup>△上</sup>。お<sup>△上</sup>か<sup>△上</sup>く<sup>△上</sup>と<sup>△上</sup>あ<sup>△上</sup>と<sup>△上</sup>。け<sup>△上</sup>お<sup>△上</sup>よ<sup>△上</sup>ス<sup>△上</sup>、お<sup>△上</sup>  
じ<sup>△上</sup>そ<sup>△上</sup>れ<sup>△上</sup>つ<sup>△上</sup>と<sup>△上</sup>お<sup>△上</sup>して<sup>△上</sup>へ<sup>△上</sup>く<sup>△上</sup>。お<sup>△上</sup>そ<sup>△上</sup>引<sup>△上</sup>よ<sup>△上</sup>て<sup>△上</sup>お<sup>△上</sup>け<sup>△上</sup>ざ  
る<sup>△上</sup>よ<sup>△上</sup>す<sup>△上</sup>。例<sup>△上</sup>の字<sup>△上</sup>を<sup>△上</sup>あ<sup>△上</sup>と<sup>△上</sup>て<sup>△上</sup>。お<sup>△上</sup>そ<sup>△上</sup>れ<sup>△上</sup>つ<sup>△上</sup>  
せ<sup>△上</sup>ら<sup>△上</sup>し<sup>△上</sup>も<sup>△上</sup>く<sup>△上</sup>あ<sup>△上</sup>。や<sup>△上</sup>ス<sup>△上</sup>あ<sup>△上</sup>と<sup>△上</sup>。お<sup>△上</sup>の<sup>△上</sup>ド<sup>△上</sup>。け<sup>△上</sup>る<sup>△上</sup>  
お<sup>△上</sup>も<sup>△上</sup>そ<sup>△上</sup>る<sup>△上</sup>よ<sup>△上</sup>と<sup>△上</sup>。お<sup>△上</sup>そ<sup>△上</sup>く<sup>△上</sup>も<sup>△上</sup>え<sup>△上</sup>。ほ<sup>△上</sup>の<sup>△上</sup>て<sup>△上</sup>こ

はよても。くのとく。続きく。辞の下る。向そ含  
とつすよそあく。上へひしむ。くく并ふつ  
玉の伝のぞのや伝の。の字のすそいひて  
まのあ日わよる。スカのふく。 宗友  
くくのごとくそんせくこの、正例よれ  
京築はまきの。カとふ修中ら。丈主  
えい代めうきめ。アツラ。内多。季今  
けのそぞのや伝の。のよそあく。ほののう  
持一正人一正人。わよ。あく。 岩さ  
下  
春持といひて。りく。春持よそあく。  
うぬ洋の。向よい。ひきて。きひく。一持く

く御事で何や。ゆく。すま。小半  
はうてよほどのこぬ。つひ字。ギュウ。とて。何  
引ゆく。き。立。アセ。シム。よ。う。も。が  
やそ。う。何。や。ゆく。そ。の。ア。。何。や。そ。何  
こ。さ。そ。つ。き。や。う。き。な。よ。何。や。う。う。う  
かく。く。く。く。く。何。や。う。う。う。伝。通。う。う。う  
お。五。方。や。宮。よ。神。し。出。う。や。明。あ  
され。力。や。歎。の。行。う。う。ひ。り。て。高。半  
二。勺。と。切。字。る。神。も。う。う。を。う。う。ひ。み。う  
と。も。あ。ー。そ。の。得。く。く。く。ん  
といふ。し。そ。ま。く。く。く。く。う。三。者。と。経。方。や。と

うて。堅よりあく歎息のやうう。さてよく詮考  
やとうて。そさまざき考のやうそ。實より詮  
考も出ますやうんと詮考の註をうり化る  
程よそをよき。ぬくふもそ堅の補充や問  
刀やうどいひて。そとやうそぶいくよ註する  
べたのすうふいとげ註もとつあります。仮附の  
すうふうをうとくいふ。いづとつふんとあ  
くふわと註をううたまきあう。是一つ  
の久仙の目安うう。假考の久のてよそはのみ  
で。實より詮考もあくさく又へかと辞を含てす  
とよし。又詮考もあくさく又えにてます。一

くよ詮考もよ。あくう字數多くるくよ  
辛の例もうういて。くのとけう字考のすうら  
まう経てにあてゐる。上へうつと下の句を含  
と二不ある。ではそはの定くよはう  
れ月やのうそあくさくめく。若つともつよ  
べきそ。背れて示てと金川もてにはうき  
へー。うそ又そ又ひつとあくふてそ。てにはの背  
ね考とひうきていうよぞや。け辞の背れ。あれ  
はよそ又へさうやうおがう。けす七言集の  
ふよくばくつよつー  
行もろよあそやうそ付あば

け人數あるべくこそ多くて。今

け久も罕だ見る時あるれどもとありて。け  
方さうとあり。けむよつて字本といふ。仍る  
けニタマこの下へよきと。其の句を含て  
引とある。うまうらし。さうくてそ社  
と並ていとある。例す。欲得オルと並て。現在のき  
ヒ従例。古今集とみくらとあひで  
好みてそきよあらじ。さふとなぐる字數  
さくさく不自然とある。ほと方し  
あらへり。一ノ葉玉鉢巻め。妹もあらえ  
引ねぬやきとくべく。まくよくひと

芦大竹あそモレシハとおのく妻アメ。モロコ  
めづき。

袖よろそちまん花わゆり  
さくらスこそ花よかひ。ゆふ  
さくらそく人のひもうつるふを。ゆゑやくら  
はくス下よ引き人のひもうつる。と。ゆゑやくら  
下へ落ひうる。と。ゆゑやくら。人のひもうつる。と  
ハ。いゆゑやくら。と。ゆゑやくら。と。ゆゑやくら。と  
きス。下よ哉ともいふ。まく

くくのごとく云れ。まく。下よこそ人の  
心もうつる。と。ゆゑやくら。下ス後のくくそい

と切る。げそきのそのをう。玉の伝も  
かくのどとを。本のほのへ捨ひて出ま  
り。前よりふ上の四月や利きやのや又字。你  
のやどを切らめとんに遠ひせらへよ。  
けちそでてめ学の輩ちよ迷ひ一人もきよ。  
け書ふと里語と目あそ付て。ゑひのうんそ  
テクレヨ平ぬのぬめれの里語ステニラ  
るどえは你のちかーていうもかまの人よ  
ハ。太るを傳そくろとみて。雅言を俗言又正  
し。すすくおがくよの術ふと。ヒテス今よ昔  
六十年をと前よ。かさーれ。あゆひ物とつ手書

よ。京の不二から始ていひをかゝそ。えほふう生  
捕す。河の玉の川そそくもくこうで往と  
編く。饅古源うふス。よきふもありきふも難  
あ。書る。

113 月や小 月 日 和 定 め み き 翁

おきわのきのきのすと下のきえ経て  
くくいとさくとあ。けやく称歎のアリて  
るきるあよいらうと  
ゑひんは數かく月を暑くし やまと  
やうす。ゑひんのとがるてせう。管とひき  
サム病の付てねくと。言ひ、だあなみ成ていふよ

も書きゆあらう。然るそぞほんじときてえ自然  
とげ教みく尼がおつてといひるもふくと。けむ  
ふらひがなまくし

がくの如人の遇そゑううふ。我もくく侍り  
く。成えが田かきびみ人のをと同罪る  
一しがくらす我をかきびも又是よ因

## 七部集の内てよはづのえざる發句

集中<sup>シテ</sup>中の日たハ崩壊<sup>ス</sup>。あゝやアト<sup>ト</sup>の上<sup>ア</sup>  
やあう△やそゆうふ。文字を□は中<sup>ヨ</sup>やく<sup>ム</sup>た  
ずえてよはのそのたぬふにあらよゆ字をかく  
うス。うくあらまう<sup>ハ</sup>よのま

いづの体<sup>チ</sup>もや文字をゆ字をそ<sup>ー</sup>ー<sup>ー</sup>  
や<sup>ー</sup>たよ<sup>ー</sup>ぞ切<sup>ス</sup>とくえ。やといふぬ<sup>よ</sup>  
やとぎひ得<sup>ス</sup>多<sup>ク</sup>。やと頃<sup>ク</sup>のや<sup>ー</sup>のや<sup>ー</sup>  
や。もかく<sup>ク</sup>のや文字を<sup>テ</sup>。今<sup>の</sup>せよ<sup>マ</sup>ゆる  
人の<sup>セ</sup>うよも<sup>シ</sup>ゆく<sup>カ</sup>ゆそく。うと<sup>シ</sup>ゆ  
ゆよ<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>のやそきひく<sup>シ</sup>。鏡<sup>の</sup>三<sup>ミ</sup>よ<sup>シ</sup>

ぬや文字のち代あり。又治室をもるを自ら  
治室をもる。かはまえ疑のきのや文字をせへ  
り。是今人の信をもれ。人の信をもれ。古人の信  
をもれ。とまあい。今人の信をりふともなく  
もづくよ。七経集の内や文字の行ちうひ。不  
そほとひてあくよ。举

ノル原をきのにてく

四

玉 玉 玉 玉

去 来 去 来

疑ふすをきわそ疑のやのきひがまう。ゆゑよ  
不、和合けまいくつもき。ばぞて疑のぞよあい。結  
あ。中のぞいふぞう

サ一貸是

ヤ

毛羽田マツタカ一 貸是

ニ

毛羽のまう。仰下のまうえまうのと。大うも羽  
のまうであうと。あうと。りそまうと。口やと。ふ  
極う。げうと。さよあい。あさよまの形を土産  
みまとあふぞ。もと毛羽のまうと。あうと。あうと  
ひぞ。口やといひまうとのそじ。是ぞと。りそき。辞  
う。毛のぞと。おうと。がよ。西ふぞう。一貸是  
が毛羽田のまうと。ふうと

サ一々世それむりしき

ヤ

きの増

且系

や文字居らひ。つひるぞといふ。ぞ文字の行つき  
あう。あのぞとス又豊う。是そアヤヤとその  
行ちうひ。もと。年あへー

ソ流き木の枝やあらそく花の紙  
スマジの田植やおさきいゝ時 许六  
ア喰や門かお行いきの力 里圃  
やの字だらうう。是の中のうといふ。絆ひて  
切うう。づふ一あて写うう。管ぬやのう  
絆のやとくう従あう。此してハヤの主不あ。引小  
て取う。おーあて穴ふう

サふうのちつとも無や家の日 宗山  
スけうとまえ管の極やうちのう 結車  
サ三をうちうて行ス松本や柏の苗 八北  
ソミの蔓やあ丘上戸の花の枝 結圃

けやいもよまへスヤの字。まよあへ。たよ  
人のうくきし湯ふ。まくのび。切ううり  
るるへくヌシニふ。は偏よいふへ。是コ  
似てあーきくアさうくねぬかのや菖蒲  
のむ。尚ほス切う。称歎のやく。おのやとがれ。あ  
キテ絆あ。やと絆と。うとく。よとのあう。ういと  
ゆれ。すまう。けん。あく。きい。得。まの多  
きく。ぬとく。杜撰ツサン。うす。ごと。管。う。ふく。ソ  
サ柳のう。やや。管の。下。一。聲。口。ス。ふ。き。絆  
の。や。う。絆の。絆。ひ。み。え。切。う。や。と。脚。小。管。ス。舉。れ

サちやれはた何うれと **や** 秋の夕 何西

何よきりやといふ夕の月

ア旅あして夕一 **や** 深世の様 拂 大せば

やの字あらひ自旅あして世の様そきそ夕

夕るで。夕一はとそべき極。人よ夕かうるす

夕一くそくへ。夕一やと絶ふとぞさよきりく

ア裏古のいつく **夕** や は 花 昙碧

いつく夕とよとひてえてよは夕の夕

、さきよるくもとよ **き** や 彩を

彩をあきてさうぐ人よくとめといふんよくと

は夕の夕とまもよきりといふのぞ叶ひ人び

よくとまもとりふくうを。まよくともよくや  
させのぞかまくい。よきやすとそ切れを。纏てせ  
夕しやくぬやくキヤと続く行あうあうや文字ハ  
くもーし。字のゆきやるのぞな。

ス秋風 **よ** やあふき池の上 依く

日も経のやのねみて。そのうれ。秋風よといふ。

妹のあふきとまくき行あう

シメ **よ** 金くふ **や** まー丁 圃の

あのうみ似て異う。やの字みらひ。切もさび

タ言やとて帰う。いそゆ。称歌の切やう

ぬけよきひて死ぬ **や** 秋の蝉 丈よ

弘めよとてそ切のひ歌鳥のやう

號みん吹草をやほりやの字を書き退けこと  
もいもいと多ば集よし

小宋花ふえのうんや 雜はなふ

万平

翁白は幼字うみてこがるるなるとあひ。やどく  
いづぞ切るとくえ。翁の名あもくへとさうのがこ  
げやのきひざまくぬする。たゞ一やの字を切る  
ことしはふまとて切てそらつとのう。続うのぞ  
すみほく

サモよくや萬の中うめ氣 旦氣

アちくくや泣きく よ落敍 萬子

けやじうふそれ是よ似てよきと

アキヌカ余のまづいときて 陰風  
シホくやる戸のさく サ萩の声 宮芭  
ア新子やひくめくふ。秋の音 尚自  
題ふふもゆ下ゆきうづ。上のみ文字一匁  
の要と多くふるひで、や文字まく叶つ  
ソクすまくやひ處一まくみくく 壮然  
、ね草やそくめ手の手のへうつ 木也  
ア不ときひづくくやんゆく 度 き  
、何とくく柱くう葉のを きくよ 巴丈  
、清く河を游言はきふ一橋うのだけすくすえ  
て。天むろゆくわうくハくいそ。もくとまくよ

五音一まへふくぐくといへど。ぬちよふくぐく  
 すゞ。ふく碎くのぞくめぬやうのよすとすゆ。信  
 てふく碎くいともいふく。碎きとそくとあた  
 の元氣よ任せ。仇よ碎き。怪よ碎きしも  
 ろう。みよす。碎く。へづつく。とせのぞくめ  
 ふもひスサのあや兒の歯くきのうづくさ  
 えきばらるこ。うづくさとこそそそく

ソ白雲や<sub>ヤ</sub>百合の花 支考

もちのほそつゝかと切くやるで不叶。又  
 垂柳の根の字もひよく窄オナリてまゆ。此か垂柳と  
 いふんとうづくさのほのほそつゝといふで

サるうで牛田の里<sub>ヤ</sub>ゆくふくれ 乙卯

是もよく人のまひほすやう。はや切もせひ。又  
 やの字も居らん。

ア連き<sub>ヤ</sub>往來をく。花の時 荷

はく連立<sub>シテ</sub>往來をく。とつようされ  
 て。とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
 大行ちひく。や文字の余考へ合ひ。一。ねくまの  
 やみ字集中句。みくへざくは偏よいよへ

ハ萱<sub>ヤ</sub>む<sub>カ</sub>也ふ異き花のいろ

ひとよてよえみて。けのよきの夜宵百合を

いろく異きさまのをひると余情えこめ  
いのてふる。中すせ宣子を付ひくも  
アトミキア。

昌陸のねとス。シヌハ代のま。利吉

ハシミキとあるとハ代とひよく、シテ墨  
ガ繁の声もさとアツ

サ功字る。相一あよふふるれと黙まで  
サ奉ともものねあ小そとを勧

サハシテよくあよつて合セラフアシヒシモテハシのそん

アセミリヨ見アツ拾ひぬ草のネ吉次

サセウスドナタミク社のうよタキユ

舟あ

サキアヒの街高一田アツ  
サキアヒの街高一田アツ

アツアヒとアミマのメ草ま  
アツ徳く内アミマ。然アヒテモサリバギ一るよのアミマ

アツアヒとアミマ。アヒの高アヒ街アツアヒとアミマ

アツアヒ本被もそのアヒ  
アツアヒ本被もそのアヒ

アツアヒ本被もそのアヒ  
アツアヒ本被もそのアヒ

文舞  
宗道  
太也

ア 杜 みよん 今 之の ある 日  
サ ぬ のを 持 そく て 況  
まうるど のを

九約

同集中 てよはよのえみやよ  
ちえでさよあめうこ

や文字のくさ

四  
六

い人やむもくも  
捨の葉やひづらふくし 枝のれ

古力

桜子が當時絶句人としてゐる

昌房  
进入

卷之二

ヤスのとえみくわす。社の夕そつよ  
ちやんとそのやの山例。ぞえふねとぞして  
ぞうはいざや林きよ。言葉ぞい又達了  
サ わ ゆ ふ や え 息白。 面の内 き角  
リ 窓ひやーのあそとせりねあ。 し  
翁

白一も白か。赤一も赤か。三つともあれ。まづお  
もちくわど。わざわざ。やがてのそん。わ寂  
く。やがての面の息。ひづか。ひづかの魂  
う。白きとぞして。そやそゆ。上のやく。  
ほろげく。やすて。たのむ。例う。わが事よと  
せぐ。もやそゆ。けいじのうち。こす。四

シロハヤウタカミツルヒ

卷之三

△ かやまのねこ人と

國  
文

伏字ニ不思議と思ふ。とくとくのと  
きより伏せたくなるのである。今も卓然とよ  
きやうべにそぞろとふきあへてゐる。どうか  
あやしくありと。そしてよくいふ事  
あるのすうすう。わびの糸はいふべし

め言ひにありて是

支角

二切字ニ下きて。あくとせのじくのま  
さくふと。あくといふ。二切字みてく。句う  
ありとりの字よ。下きて。有りらるをきくと法て

一の枝と二の枝。毛角えよくじよそをみて  
門よりありとまつよくきるへりう。片よりいて  
あひの白いホース又黒う。白た白。赤と赤きて  
語をよせぞう。有とあと斗きてそ語をよめぐ  
ヒ勧めやるふゆせ半のすきけ。もとゆき  
タヤあまういそえむた、ころふーし。 牡の

十一

かくらひてもよき下ろぐ。一ツのすみをうへ  
てまかでよそけがまもあくもくくとくと  
あくでよそくあくくふくよくひ。ほんねん  
そつまく。きのかーとおどよあくとひよす。  
さくと  
荷子もじきかていふるーとくとくと  
ア田のねのまくうさと連がて。や小  
さくとまくわくふるー  
さくとまくわくふるー  
サ風流のそーゑやよその田くふす。翁  
ソセ草花や序草すもよめまみ。柏  
中のやとうす一格。切くやことくふくとく

、まのゆやいづのまよかふり  
アゆのあや年元旦。いううくん。朴什  
サ仇保娘。ゆ井の面。ううくん。韋  
ゆのまのやえふ例ふ。ゆのえれえ日ふるキ。と  
うくふくまくまくまくまくまくまくまく  
仇保娘のゆえはよ例てかしは  
アサ栄のもやねせ半のまのあひくよ  
けね下よ例そくひま  
ううくやゆよふ聲をうくく。越人  
、革麴やを乞の日と乞ふ。胡皮

立く。やのひみそ切のまよくそくひつ。の  
てふえり。せふどしこじあくアム。やと切て  
いえの二ほ切とひよてよはうてアふえ。行年の  
方えよけんもひと。き麿の方えいよそすゆ。けふ  
くわくえをうそとのひーく自むう。ゆ

ア め あちや。おーかきの亨裏え

隼下

ア フ 日や清つゝとくぬう。トね  
ニ うとも歎息のやまと。くうう言放く  
情きてまゝてふ。歎息のやとて。伝たのま  
うづいとくやくらめやスラムや。されの歎息と思ふ

いふ。娘しきも面白くも感ひまく時のゆを歎息  
とつす。歎きのゆのこゝよ。くつ口へるやうなも云  
て。そどうもとむおかしそ。立とつあるよも云ふ。いし  
ゆき。立のあはうとく。時げすふ。老ぬは遠き。不清  
ふ。おとたはよをまじざうぬう  
、お好やむうの立のまくし。 猿人  
サ 支あか座枕の小まよ花咲ぬ。 床席  
田 おとづくつうげくや。切の傳はくくらへ  
ね。清やかな水をうかべときれ。 さき  
立ても歎息のやう。名所のやといふもとへ  
名ふあつてもせよと。

大ヤ文字のくまくらはよるからくま一。ばあもよき  
とあきとあひど。うるさり小ぞ不早。餘ハは編又譲徳ニ  
スホムトモトモカミの市のさま。 良  
タ田植キ。またうるらのくいり。 重行  
ア。立木ひきうきの者。 荷子  
スハモキモニテ。風う。あゆう。 利牛  
シ職人の娘子。タモクタ。 土芳  
ばのそがよ通ひ。立く続ひ。と切る。 不書  
ア。肩つけ。いくよもうぬ。モモ。 美文  
セアエ。後日はちの事。くま。すかとある。モヤウ。てりうの車。ユ  
ケ。の行。そつ。とよさ。み。一。てよ。はの。よハ。景

のくま。二重よの。ア。 交換  
ア。在。姫。二。度。指。そ。お。モ。リ。 荷子  
内。大。く。ミ。ヌ。之。日。さ。う。白。一。弓。矢。午。サ。マ。ヒ。ト。五。ほ。こ  
ひ。着。モ。治。定。そ。と。め。ス。リ。ト。あ。く。く。わ。う。古。代。今  
年。あ。う。き。て。み。ス。と。中。こ。れ。重。の。み。ナ。ハ。き。ふ。あ  
ら。ヒ。ト。さ。か。ス。化。と。て。よ。大。よ。く。り。く。め。ね。の。と  
ろ。う。お。よ。そ。ハ。え。な。猪。と。て。た。よ。き。よ。み。く。さ。す  
み。あ。く。を。一。む。く。く。け。う。お。姫。よ。く。わ。ひ。し  
こ。の。字。あ。く。で。い。く。な。と。な。り。く。向。ス。け。て。  
ふ。ま。の。す。し。に。る。合。め。ハ。又。字。あ。ま。く。の。而。例  
く。化。ま。よ。及。ぐ。ぬ。と。つ。ふ。被。の。て。よ。は。そ。ハ。

同集中定りくる切字きくしてそのいふる  
サ義うふ雲ての魚いもちあらんれ  
、くきるよかまにて猫の立すみ 去来  
様テよねら花の立すく  
、おちつきて魚を化せの様 羽利牛  
う伏せと菜の上の上の私のモ 金世  
ア沢をの墓をふ小の村のよ 文鱗  
、門もろを賣て始一 荷内習  
リ余ふよあてホナのねえの年支考  
ス浦つきとまくまで月 李由  
、法よくきめくじて花役 亦可

、なよせてはる一の月のき  
サ左角の立つてりよ花のう 千那  
アすらつきとときよるの巣 伝  
、上下のさくぬがよゆの林 昌碧  
、くらうくほどのあよしき、 越人  
サ新の名ふるくよひれ 七角  
、け中の山月とやくよ力 わみ  
スくらうくよせあると秋の花 伊奴  
サばとも又くよれ 月 月 月 月  
ア暖そむつくさくよほ やほ  
、いそくさくと夜の林 沂堂

ア 扱のひよかとよ子供のあすま  
ハ わえきき詠あはひをそどせや  
ア 玉のえりとまとうつ花  
ア ちよ草くさゆにさくらの截引字なり。上のく  
サ がまと。よそはだ。ごどしのようから。下えあくみ  
サ 付きて結くねう。のようくさゆのくら。さよ  
タ あふのあう。がふあふのあう。よそのかき。わそ  
のれあく味あつ。せきのくらみて下え清  
タ ちる切字うんふゞ。是ひうそえ詠のそくよく  
去め心の切を名中の切接物也。よ圓一を圓一  
云ス天ぢやのぢぢやの接ぢやの接ぢやのとみて

用ひ三行近遠うす。ばくうちむて。あきこらまみ  
きいゆく  
ア 神もくとねの葉ねく。りくのま  
さまくのとく。とぶか。年。のま  
ス カ。きよことく。も。袴。もく。はる。  
ハ ちう様あまうもろきよ。縫て。ゑ  
百ぬもまよれつ。く。柔。楊。吹  
サ 人。よ似て猿。も。く。そく。む。秋。の。風。  
古。ハ。く。の。り。あ。よ。似。て。さ。よ。あ。べ。定。く。切。字。あ  
教。よ。い。ズ。ざ。ふ。く。か。ご。モ。ニ。そ。舉

いろは四十七字皆切字といふ説

古人曰。いろは四十七字皆切字ううと。古人も近  
去來抄曰。史師曰。切字は用る時々四十七字皆切  
字なり。蓼木も雪の華よ幽玄法や。白雄寂樂より  
許六云とあり。こそたゞ人の説あるを。许六のいそり  
うまく。まんういろは切る羽友とを羽友に人  
うそすとろど。いろはおかひめぐわせど。あ  
まうあきこをつるす用ゐて。ひまく老  
くふねえ。きいやくもあてば切字ううだ

スうううういひて 心ウロウ。今昔三十年れ  
後。切字四十七字をとりふあひ。おのくにうそ奉。わ  
かよーおはよ出で。今求るよだらゆ。そひそ  
きよれー。いろは切とりふあひ。けたりけむきひ  
がふみのせめく。是心のせまよえ出づ。あく  
もあると。四十七字皆切字とりふあるを。想ひよ  
信して。くくみどね平ひくかくめぞ。ぬまの  
人。天跡カタヌカのひれ。十人よ一人。是心のすよ  
迷えさくもあへとそひとさむるより  
伝いろは四十七字。皆切字ううとおへとを兼きを  
うへとち下に在る。六十餘みず字のゆいうえの

文字あつてあるを一つあるだけ。すなはて文師のいり  
たまふ。いろは四十字あらへ切字といつと。切字  
みえあくびうすもぐまうらんすのとく。二字  
三字組て切とつあるもるか。又一字までくをつ  
ぶむるやうぞくどもくええひと。上のほき  
みあくで切とる。やうぞくども上のくわよ  
りて切とる。一字みて切とつふ文字る。  
四十七字みてにはといふく廉きゆる。徳きく  
ろくしんげてにはといふくらも。あいえねの  
五文字みてよほよきとく。きよのえいえス。や行う、  
わ行く。スカヰちの三字もきとざれど。てにはと言

も四十七字の内彼カレ四十二字ヨリざと。お  
切字とちくいひ傳へ。うあくとつふく然うそ  
皆切字とくくくあくよくよく。さきくのひぐす  
も出来て。板平ハタケヒラを始ふ。おもおお旅など  
ち従る。支元支考う門裏うくと。支考も古今抄によ  
る遠はとくいへかのそ

いろは切の羽友曰。序は四十七字ひとつにて切さ  
るもよと見る。うよひりてくわくと  
イ ちうよ。花の文左。ニ尺浮  
口 ねそそく。おゆめ秋の天は月  
ニ まうちも実。角刀の水のころく

トタニのゆくつる。又とてゆく  
ルうきもま。めてみのゆそゑま  
ワ我三ツ帰。くもも果たぬゆく  
ウもをよき。未ふ中。ど一のそ  
エすまかく列がくねうえちうをき  
才絶よらん極ようみのれ定の秋  
てゑれう。する川やの行くか  
うくのごと。又もいの字。そのるの字。ぐづくと  
ひの字。ねうえのえの字よ。下そ付。是を切字とせ  
で。いうましに十七字を切字うく人。中もそく  
きをうのれのれの字。ば字外を切くとうくと  
うく。

と傍註や。まの字をあゆ。至小のれの字のかと  
まの字切字うくと註や。ねうえけえ説とく  
うくつよへうく。魚と通ふとく。ほくよきも  
りぎくのきよのかぐくのす。似てゐる体あゆのゆ  
こも詠うみて。よく絶板モヘー。お諫言モキづき  
とくと彼連じゆくとく。かくよくよく  
太宗近と名ふ老人は書の跋よ曰

すいろはゆくとくとく。印字そよくよくゆく  
きえうの四十セ字を切字うくとあくよとつき  
ての巧言とくえく。つづくもわくのみよくゆ  
きのゆく。元巻し有益の末言アヒテ。後をくべく

とちゆーといふが。やがておとづれ  
すあまくあらじ。いづかのむすびそ  
うへんと。おふ敵ともどもやくよ  
そつも

まもぢ四くまよりく。われのばくはまと。つく  
るやと。あゆと。はまと。よよ。自ぐ他なり。  
他ぐ自よ入れ。こくどくなどきんそくめてこま  
はまがく。えぐき。ひまく。よそん。わいそんとく。  
そそぞくあく。うぢめ。さくろえ。まく。おとよす  
つ。ちくわがむきの。ういする。びせんよ。かくさうす  
るよ。かくよけおも。よそめよ。そそちくからく  
さくわしおふく。て。よ。まへ。がく。そく。よ  
うんあく。といえらぬ。まく。およ。年。の。秋。二。百  
十日よあく。

天保五甲午年八月

江戸日本橋西河岸

書林 鴨 檜之本北元

同 淺草諏訪町

同 伊藏

同文草稿

書林

同

日本詩四百首

詩集之本此示

天保正甲年辛人目

